

## 御義口伝

如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。今日蓮等の類の意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり

(二七六五頁)

只今拝読の御書は御義口伝の一節ではありますが、私たちが御本尊を信受して南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身は即御本尊の当体であり、仏であると申されているのでありますが、しかし、このような事を申されていても我々凡夫にはなかなか信じられません。しかし、只今拝読の御義口伝にはそのような事を申されているのであります。日寛上人はこの事を判り易く解説されていますので、日寛上人の仰せに従って少々お話し申し上げてみたいと思います。

仏様のことを「如来」とも申します。御本尊様を信じて南無妙法蓮華經と唱え奉る時、我が身は即ち仏であると云うならば、又私たちは即ち如来であるとの事であります。この「如来」の「如」というのは、「真理」とか、「真実」と云う意味で、実は仏様は「真理の世界、真実の世界から来られた方」と云うので仏様のことを「如来」と云うのであります。普通、如来と云えば「釈尊」のことを指して申しますが、しかし、仏様は「釈尊」だけに限りません。只今の御書にも申されているように、「十方三世の諸仏」と云いますから、東西南北上下四方のあらゆる世界に仏様がおられるのであります。或はまた過去にも未来にも出現いたされるのであり、そうした仏様をひつくるめた場合も、これを「如来」と総称いたしています。では「如来」とはどういう御姿をされているのかと云うと、「紫金の妙体」と云って、金色の体に瓔珞細軟、七宝を散りばめた美しい衣を着されており、また三十二相八十種好と云って、人がこうありたい、ああありたいと願う全ての美しく好ましい御姿をされている、と云われています。

又、仏様はどんな御姿であったのであろうかと、後世の人々が釈尊の説かれた御經を基に様々な想像をめぐらせて造ったのが、いわゆる私たちが見たり聞いたりして知っているところの仏像であります。しかし、私たち凡夫の想像力ではたかが知れたもので、その程度なのです。しかし經文を見ると到底そんなものではありません。それでは天人の姿すら表現し得ていないのです。と申しますのも、大聖人様は、梵天・帝釈等のあらゆる天人、或は舍利弗・目連等の聖者の優れた姿・形・種々の功德を述べられた上で、「法連抄」(新編八一二頁)に『仏と申すは上の諸人には百千万億倍すぐれさせ給へる大人なり』と仰せになつておられます。しかし、そのように優れた仏様でも、「有為の報仏」と云って無量無辺阿僧祇劫と云う永い間仏道修行した結果、出来上がった仏で、そう云う仏様は「未免無常」と云って、人間が生まれて死ぬように、涅槃と云う無常を免れることが出来ないのであります。このような仏様は姿形がいかに立派であられても亡びてしまうのです。このような仏様は、そういう仏様を必要とする衆生の前に、即ち衆生の

愛樂する姿形を示すところの「化仏」、つまり化けた仏なのでありまして、本来の無作のままの仏、即ち無作三身には遥かに劣る仏である、と云うのであります。

それでは「無作三身」とは何物だと云えば、十界三千、即ち、この世界の本来常住と云つて、永遠に変わらないところを云うと言うのであります。ここところはなかなか理解し難く解りにくいところではありますが、これこそ究極の仏であつて、この外に仏はないと云うのです。しかもそれは我等が当体、即ち一切衆生が無作三身の仏だと云うのであります。先程の御書で大聖人様は「今日蓮等の類の意は、総じては如来とは一切衆生なり」と仰せになつておられます。「総じては」とは、一往は、と云うような意味でありますから、「まだ確かにそうだ」とは断じられてはいない事を示しています。即ち未だ一段浅いところの捉え方です。この「如来とは無作三身、無作三身とは一切衆生」と云われたのは実は天台大師であります。そこで天台宗ではこの言葉を以て「究竟の法門」として立てているのでそれ故これ以上の優れた解釈は出てこないのみか、やがて修行の必要を全く説こうとせず、「生まれたそのまま、日常茶飯のあるがまま」でよいと勧めるようになったのであります。しかし、大聖人様の御立場から拝してゆくと「如来とは一切衆生」と云うのは、一往の立場からであつて、再往は、つまり一重立ち入つて拝してみれば、南無妙法蓮華經を信じない者は如来とは云えないのであり、南無妙法蓮華經を信じる者に限つてしか如来とは云えないと云われているのであります。つまり、如来とは「別しては日蓮が弟子檀那」に限るわけです。しかし、もう一步立ち入ると、「日蓮が弟子檀那」が如来と云うのも「総じて」云えるのであつて、別して、つまり突き詰めて「無作三身とは誰か」と云えば、日寛上人は「取要抄文段」に、「別してこれを論ずれば但これ蓮祖大聖人のみ、真実究竟の本地無作の三身なり」と云われています。

されば冒頭拝読致しました「御義口伝」の文は、二重に拝さなければならぬことになる訳であります。即ち、「如来」とは総じては一切衆生であるけれども、別しては日蓮が弟子檀那である。また、総じては日蓮が弟子檀那であるけれども、別しては日蓮大聖人」と、こういう風になるのであります。それでは「無作三身」とは何かと云えば、「無作」とは、「手を加えない本来のありのままの姿」と云う意味であります。「三身」とは「法身・報身・応身」のことを言います。植物に譬えますと、紅い華、青い華、これは別に染めたわけではありません。自然法爾（自然とは、そのものとして自らそうなっていることをいい、法爾とは、真理そのもののつとつて、そのごとくあることをいう。つまり、他からなんらかの人為的な力を加えることなく、自ずからの姿のままであること。）であります。これは「無作の法身」であります。そして季節の推移にしたがつて、芽を出し花を咲かせ果を結ぶ（無作の応身）。このことは誰も教えないのに、少しも時節を違えることがありません。つまり、本来具わっている智慧によるもので、これを「無作の報身」と云うのであります。また畜生に譬えて申しますと、犬・猫・鳥と、それぞれの違いは「無作の法身」であり、それぞれの特徴は「無作の報身」であり、番犬になり、ネズミを獲る用は「無

作の応身」であります。

また人間に当てはめても同じことが言えるのです。それは、我々の五体は「無作の法身」であり、人それぞれに異なつた才能や智慧を持つことは「無作の報身」であり、我々の日常生活の為のそれぞれの作業・行為等は「無作の応身」であります。ですから「理」の上から云えば、植物も畜生も人間もすべての一切衆生は、「無作三身の如来」であります。しかし、「理」の上で一往はそのように云えるけれども、実際はそうではないと云うのであります。それは、「一切衆生は膨大な数ではあるが、二人しかいないと云うのです。」そのうちの一人は「無作三身の真仏、日蓮大聖人を信ずる者」もう一人は「信じない者」と、このように分別するのであります。つまり、「理」の上では無作三身ではあつても、無作三身を信じない者は無作三身には当たらないと云うことであります。例えば「あなたは人間ですよ」と云われて、「俺は人間ではない」と云うのであれば、いかに人間の姿形をしていても人間ではないでしょう。「お前はここの家の子供だよ」と、親が云うのに、「俺はこの家の子供ではない」と云つて出て行けば、その家の子供ではなくなるのと同じことであります。しかし私たちは「無作三身の真仏」を信ずるが故に、私たちも「無作三身の如来」であると言えるのであります。それゆえに、このあとの「御義口伝」(一七六五頁)に『此の無作の三身をば一字を以て得たり。所謂信の一字なり。仍つて經に云はく「我等当信受仏語」と。信受の二字に意を留むべきなり』と仰せになられて、「信の一字」によつて我々は「無作三身の如来」を得たと云われるのであります。また世間でも「不忠・不孝」の者は、「忠臣・孝子」とは言いません。更に又、犯罪を犯せば、人間としての自由は束縛されるのと同じように、仏様の尊い教えを信じない者は、「無作三身の所作」を行じない故に「無作三身の如来」とは云えないと申されているのであります。では「無作三身の所作」とは何かと云うと「御義口伝」(一七六五頁)に『無作三身の所作は何物ぞと云ふ時、南無妙法蓮華經なり云云』と仰せであります。つまり、私たちが御本尊様に向い奉つて南無妙法蓮華經と御題目を唱え奉ることを「無作三身の所作」と云うのであります。それ故、「無作三身の所作」を行ずる身は無作三身であるわけであります。ところが、この所作がなかなか実行出来ないものであります。また、日寛上人は天台大師の文を引かれて「撰時抄文段」に「智目行足・到清涼池」と仰せありますが、これは「信心を目に譬えられており、唱題を足に譬えて」申されているのです。

目があつても「足」がなければ、目的地には到達することが出来ません。つまり、「信心があつても唱題の修行がなければ、成仏と云う目的地に辿り着くことが出来ないのです。あり、唱題の行があつても御本尊様を疑つて御題目を唱えているのであれば、これは足があつて目がないようなもので、目的地を見定めることが出来ないようなものである」と仰せになつておられるのです。更に又、日寛上人は同抄に『本門の題目は凡そ二意を具す。一はこれ信、二はこれ行なり。この二相扶けて能く通じて寂光に到る』と仰せで

あります。故に「信心と唱題はあたかも車の両輪」のごときものであります。つまり、「信心がなければ唱題の心はあり得ないのであり、また唱題がなければ信心の歩みは少しも進まない」ということではないでしょうか。大聖人様の仏法は「一行即一切行」と申しますが、この「一行」と云うのは「唱題」のことです。ですから、この「唱題」に一切の仏道修行が包含ほうがんされているのであります。

私達の住んでゐる此の世界を仏教では娑婆世界と呼んでゐます。そして、この娑婆世界は苦しみ多き世界であると説かれてゐるのです。私たちはこの娑婆世界に生を受け、六道輪廻の耐えがたい苦しみを余儀なくされて居ります。而るに、此の苦しみを何とかして救つて下さい、助けて下さい、とうめき声を上げてゐるのでありますが、その衆生の願いに応じて、此の世に出現される仏を衆生の声に応じその願いに応じてお出ましになる仏と言う意味から、「応身如来」と云うのであります。そしてその仏様は宇宙法界の根本法理の一切を具えられて居りますから、その用きを「法身如来」と申します。

そして、この法の上の真理を体得される為の功德を積まれた仏様は又この功德の身をもつて一切衆生救済の用きをなされます。そういう知恵の報いの仏様を「報身如来」と申し上げるのであります。ですから、この世にお出ましになられる仏様は必ずこの三つのお徳、即ち「法身・応身・報身」を一身に具えられてゐるのでありますが、この中の人格身は八相作仏はつそうさくぶつ（時に応じた仏が結縁の深い衆生を救うために化身してこの世に応誕し、一生に八種の相を現じて成道の次第を説法教化することという。この八種の相、八相とは①下天げてんく兜率天とそつてんの内院に生まれ、五事、即ち、機・国・種性・父・母を覩じて閻浮に下生し作仏すること。②托胎たくたいく父母に対する愛心、瞋心しんしんを起こさずまた正慧を失わずに父母、摩耶夫人の胎内に宿ること。③出胎しゅつたいく仏母の右脇より出て、蓮華の上を七歩歩いて天をさして、天上天下唯我独尊等といったこと。④出家にれぜんく世の無常を感じて、十九歳で王宮を出て、尼連禪河ほらりの畔に来て、十二年間苦行樂行をしたこと。⑤降魔ごうまく菩提樹下に来て安座し悟りを開こうとしたとき、魔王が四度来て邪魔したがこれを打ち破つた。⑥成道じやうどうく魔を降伏させて大光明を放つて定に入り、明星の出るとき生死を超えて三十歳で成道した。⑦転法輪てんぽうりんく一代五時の説法で衆生を教化したこと。⑧入涅槃にゅうねはんく五十年の説法を終え、方便現涅槃した。）して衆生の願いに応じて小乗の法を説かれるのです。その仏様を「劣応身」とお呼びするのであります。而してこの小乗より勝れた大乘の初門を説かれる仏様を「勝応身」の仏様とお呼びするのであります。

そしてこれより更に上の法華経の勝れた法を説かれる仏様は御自身の慈悲の念慮のもと、一切衆生を成仏得脱とくだつ、救済遊ばされる為に、御自らの御意志をもつて、その御振舞いとして、この世に出現遊ばされた智慧の報いの仏様ですから、この仏様を「自受用報身如来様」と崇め奉るのであります。

とにかく、仏様と申しましても、このようにその仏様の御修行、徳力、お用きは様々であります。真実の法華経を説いて一切衆生を利益遊ばされる仏とは、この「報身如来」に「応身・法身」の徳を具えて一身即三身、三身即一身、一念三千即自受用身、自受用

身即一念三千と云う境智冥合の仏様であります。そしてこの仏様は正像末の時代を分つてそれぞれの時に適った仏が、下種、調熟、得脱のそれぞれの利益を施される仏として、末法には日蓮大聖人として御出現遊ばされたのであります。

而してこの仏様は一体全体何の為にこの世に御出現遊ばされるのかと申しますと、只今の方便品に明かされていますように「諸仏世尊は唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして、仏知見を開かしめ、清浄なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。」（開結一〇一頁十二行目）とある如く、一切衆生にとつて、最も大切な事は何であるかと云う事を教えられる為に世にお出ましになられるのであります。

では、この「一大事」とは何かと言いますと、「一番大事なものの事です。」皆様方には夫々の考えがあろうかと思われませんが、ある人はお金とか名誉とか健康が一番大事なものだという人もいます。或は美とかゆとりとか、或は長寿とか、若さが大事であるという人もおられるかもしれません。つまり、その人の考え方によって違いがあるかも知れません。しかし、仏様は、そう云うものは皆んな無常の上のはかない一瞬の移ろいであると仰せであります。

即ち、若さはいつか老いてしまい、又お金もいつかは無くなります。或は紅顔の美少年も亦年と共に老い衰えるのであります。では一番大切な事は何なのか、そして私達は何の為に生れ、何の為に生き、どういう役に立つかと云う事を知る事が最も大事な事なのであると教えられているのです。

凡夫である私たちは、徃徃にしてこの一大事の前に第二第三の、即ち「蔵の宝」や「身の宝」の方にばかり目が移り、それらを優先してしまうのであります。

そこで仏様はこの一大事を教える為に、この世にお出ましになられ、そして、最優先されるべき一大事とは一切の人が持つている「仏知見」であると明かされているのです。

一大事の因縁とは「法華経・方便品」に示されている言葉で、仏様がこの世に出現するに当たって目当てとされた最大の目的の事をいうのです。そして、それは一切の生あるものをして仏の知見に目ざめさせることだと説かれているのです。

即ち、仕舞い込んである「心の扉」を開いてこの仏知見のあることを示し悟らせ清浄な境界に立たせようと、此の世に御出現遊ばされたのが仏様であります。

ところで報恩抄（一〇三六頁）には、「日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり」と御教示されていますが、末法に生きる三毒強盛の衆生が、成仏を遂げることができるのも、ひとえに本門戒壇の大御本尊を信じ奉る功德によることを忘れてはならないと云う事です。

されば、御本仏日蓮大聖人が弘通された正法を信受し、自身の三世永遠の成仏を遂げると共に、未だ苦悩に喘ぐ多くの人々を折伏を以て救い、そして、広宣流布をめざして精進していくということが大事なことであります。以上（令和七年三月度・御経日の砌）